Keyword　グロピウス　ピスカートル　バウハウス　劇場

集合知としての ヴァルター・グロピウス設計「全体劇場」案(1927)

工学研究科 産業技術デザイン専攻
建築デザイン分野 博士前期課程
2024年3月修了

楮野美沙

主査 冨田英夫　**副査** 小泉隆　日髙圭一郎

研究背景

建築家ヴァルター・グロピウスの作風は建築に対する自身の理念を実現する過程に合わせて変化し、「全体劇場」案(1927)は機能主義的な特徴が初めて表れた作品である。この作品は、設計の依頼者であり演出家のエルヴィン・ピスカートルが望んだ「政治劇場」を実現するために、当時の最新技術を取り入れた大胆な劇場建築案である。以降、構成主義的と機能主義的な設計は使い分けられており、「全体劇場」案はグロピウスが建築に対する考え方を変化させるきっかけを与えた作品であると考えられる。

研究目的

実は、「全体劇場」案の設計過程には多様な専門家が関与していたため、これらの専門家達の存在がグロピウスに作風の変化のきっかけを与えた可能性も考えられる。そのため、グロピウス設計「全体劇場」案(1927)の設計過程における形態の変化と多様な専門家との関係性について明らかにし、「全体劇場」案を多分野にわたる専門家の知見によってもたらされた集合知の建築として再評価することを本研究の目的とする。

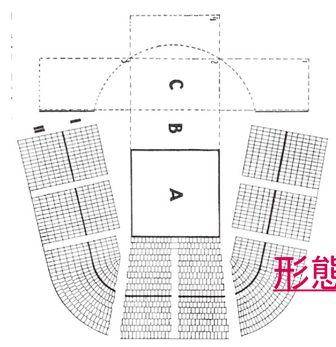
研究概要

グロピウスはバウハウス教員のモホリ=ナギの思想が反映されたモルナール設計の「U 劇場」案(1924)を参考に「全体劇場」案の設計を始めた。しかし、「U 劇場」案との形態の類似を持つ「全体劇場」案の初期案に対して、最終案では独自の特徴を見せるようになった。

この特徴は依頼者ピスカートルが自身の演劇論を表現するために「全体劇場」案の計画以前から開拓してきた演出手法である。

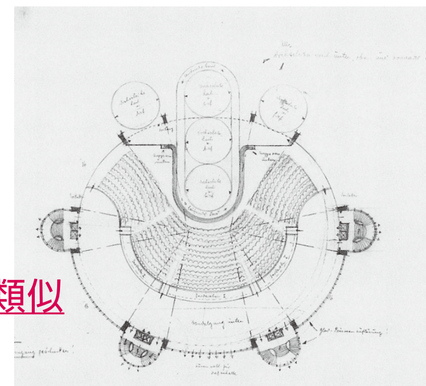
ピスカートルの舞台で実際の戦争の映像資料が背景に使われている様子

演出手法
- 舞台背景に映像や画像を用いることで、観客に内容の理解を促す
- オープンスペース型の舞台で観客との一体感を演出



「U劇場」案平面図

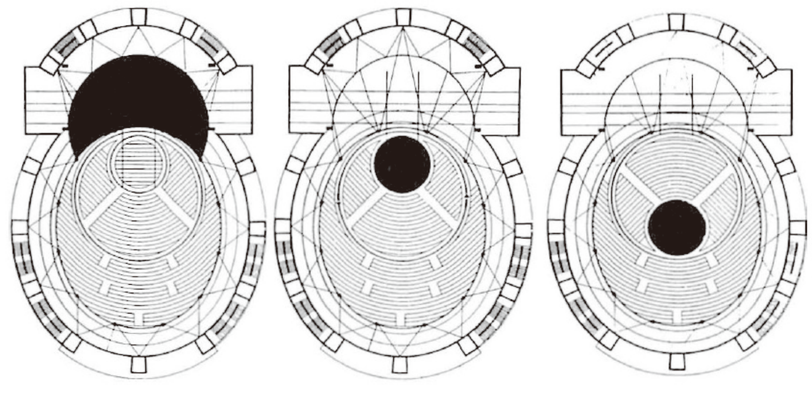
形態の類似



「全体劇場」案の初期案平面図

独自の特徴
- 映写装置の導入（映像や画像の投影のため）
- アダプタブルステージ（可動式舞台）の開発

形態の変化
- グロピウス建築事務所におけるフィーガーとシェベックという担当者達の個性



「全体劇場」案平面図(左から順に奥行、前部、中央舞台)
＊黒く色がついている部分が舞台

さらに、設計段階における形態の変化にはグロピウス建築事務所におけるフィーガーとシェベックという担当者達の個性も関係しており、「全体劇場」案は多分野にわたる専門家の知見によってもたらされた集合知の建築であると言える。

図版出典
- Winfried Nerdinger (ed.), The Walter Gropius Archive, Volume 1, New York, London, and Cambridge, Mass., Garland Publishing, Inc. and Harvard University Art Museums, 1990.
- オスカー・シュレンマー、L・モホリ=ナギ、ファルカス・モルナール『4バウハウスの舞台』新装版バウハウス叢書、利光功訳、中央公論美術出版、2020(独語初版1925、邦訳初版1991)。
- Erwin Piscator, Das politische Theater, Reinbek bei Hamburg, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, 1963 (1st ed. 1929).

まとめ

グロピウスはモホリ=ナギやピスカートルといった演劇分野の専門家による実践的な知見や、モルナールやフィーガー、シェベックのような建築分野の専門家による形態の着想をもとにグロピウスは1927年に「全体劇場」案を設計したことが明らかになった。

指導教員コメント

本論文は「全体劇場」案の設計過程を(1)設計の依頼者エルヴィン・ピスカートル、(2)グロピウス建築事務所の2人の担当者、そして(3)グロピウスが当時校長を務めていた芸術学校バウハウス、という3方向から注意深く整理しなおし、多分野にわたる専門家の知見によってもたらされた「集合知の建築」と結論づけた。この成果は演劇・建築と複数分野にまたがる資料が遺された「全体劇場」案だからこそ描き出せる成果であり、本研究独自の研究成果として高く評価できる。

冨田英夫